

【研究ノート】キャラクターを用いたオンデマンド型 「政治学」

瀧川 修吾

日本大学大学院総合社会情報研究科

A study of the On-demand "Political Science" with explanations using characters

TAKIGAWA Shugo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

The COVID-19 shock that began at the end of 2019 has changed the way university education should be. As a result of pursuing an easy-to-understand and interesting on-demand lecture, I tried to use some characters as explanatory materials for the lecture. In this paper, I introduced practical examples and considered problems to be noted.

1.本稿の背景と主題

史上初となった近代オリンピックの延期という事態をもたらしたコロナ禍は、今もって世界中を混乱に陥れている¹。日本では、第五派がようやくにして収束し、幸いにして連日感染者の減少を告げる朗報が続いている。オミクロン株への警戒が高まるなか、学生たちの健全な成長を願う身としては、このまま第六派が襲来することなく、新年を迎えられることを、ただただ祈るほかない。彼らのかけがえのない卒業までの時間が、コロナ禍を理由に延期や延長になってくれることなど決してないからである。

きわめて強力な感染力をもつコロナウィルスの流行は、日常生活のかけがえのない「普通」を根こそぎ奪い去っていった。日常の中で服役する「蟄居」という刑罰は、日本史を専攻する研究者にとっては文献等で頻繁に目にするなじみ深い用語の一つであ

る。外出自粛を求められる中、個室に引きこもって黙々とパソコン（以下、PC と略記する）と向き合う日々には、不思議とこの刑罰を想起させるものがあった。

そしてこれが存外、健康を害する刑罰であることは知識としては認識していた。運動不足で落ちた筋肉の代わりに蓄えられた脂肪は総じて日常的な所作をも緩慢にさせ、自然、適度な運動の必要性を強く感じないわけではなかった。しかし、そこは ICT が発達した昨今、蟄居とは好対照にリアクションを求められるメールは矢継ぎ早に届く。デスクワークは山のように積み重なり、我々をさらなる運動不足へといざなう。

むろん、私個人には別段、謹慎を強いられる理由などはなかったが、感染リスクを慮ると近所の銭湯や飲食店へ気晴らしに出かけていくわけにもいかず、

¹ 本稿は 2021 年 10 月 15 日に起稿され、同 12 月 14 日に脱稿されたものである。よって、以下本稿の参考文献に使用したホームページ（以下、HP と略記する）の URL への最終アクセス日は、全て脱稿日とする。朝日新聞デジタル 2020 年 3 月 25 日朝刊「オリンピック、初めて延期 中止は 5 回、実は東京大会も」

(<https://www.asahi.com/articles/ASN3S74KVN3FUTQP00Z.html>)、NHKHP2020 年 4 月 20 日「“コロナショック” 史上初の 1 年延期決定までの経緯」

(<https://sports.nhk.or.jp/olympic/article/column/0b4e7cb8c0754892b6ffa154be5ce891/>) を参照。

運動は階段の昇降程度、昼食は即席麺とつい手が伸びる間食ばかりといった酷い日常となった。結果的に鎮座して書籍と向き合い、己のおこないを振り返る日々と、感染流行の先行きを案じながら、PCの画面と向き合い、平素の講義よりも質を落とさないようにと、ひたすら文献や資料を熟読し、黙々と配信動画を作る日々とは、奇妙に似通った状況になってしまっていたように思われる。

気付いたときには、持病の閃輝暗点や高血圧が悪化し、脳梗塞と脳出血を併発することとなり、46歳にしてすっかり健康を害してしまっていた。講義すなわち、人前に立って話をすることや、眼前で真剣にノートテイクをしたり、こちらの質問に回答してくれたり、笑ったり、時に眠りこけたりする活きのよい受講生たちとのコミュニケーション。それらが、私にとって、いかにかけがえのない日常であったかを、あらためて思い知らされることとなった。

いささか前置きが長くなってしまったが、あたかも蟄居のごとく「世に棲む日々」を経て得られたこのディスタンスラーニングの知見を、未来の大学教育へ向けてどう発展的に繋いでいくか、それが本稿の主題である²。

2. 研究の動機と社会的意義

本稿には、いわばその土台となる前稿が二つ存在する。一つ目は、「コロナ禍の「政治学」—オンデマンド型講義の実践例と考察—」である（以下、前稿①と略記する）³。前稿①は、初めて経験することとなったオンデマンド型講義の政治学における実践例につき、これまであまり使用経験がなかった Google社のアプリケーション（Classroom や Forms）の活用方法を中心に、リアクションペーパー（以下、リア

ペと略記する）に寄せられた受講生の反応などを踏まえて紹介し、考察をくわえたものである。これに続く二つ目は、「コロナ禍二年目のオンデマンド型「政治学」」である（以下、前稿②と略記する）⁴。前稿②は、二年目となるオンデマンド型講義の経験を生かした工夫や改善点などをハード面（高性能 PC等の導入）と、ソフト面（前年度の成果との比較や音声読み上げソフトの活用など）に分けて紹介し、学生の反応を踏まえて考察したものである。

これら二つの前稿は、いずれもコロナ禍において大学の講義がどのようにおこなわれたのかを、外部に報せるべきという私なりの使命感に基づいて執筆されたものである。その際、学生たちの保護者や採用人事に携わる企業などの利害関係人の知的欲求を満たすべきという思いも一方ではあった。しかしそれにも増して、オンデマンド型講義でも自主性・積極性・能動性をモットーに、精一杯頑張っ素晴らしい学習成果を獲得してくれた眼前の学生たちが、十把一絡げに、従来の大学教育を受けられなかった「学力の低いコロナ世代、などとレッテル張りされるようなことがないようにとの思いで書いたのが二つの前稿であった。

元来、こうしたジャンルで文章を書く経験がなかった私がいざ前稿を書いてみると、日々の講義であまり意識することなくおこなってきた教育上の工夫につき、その予想外の効果に気付いたり、そこから教育方法の改良案や新たな着想を得たりと、実に有益であることを思い知らされることとなった。コロナ禍でもめげずに頑張った学生たちのために、その努力の軌跡をエビデンスとして残さなければと、半ば義務感に駆られて始めた作業が、図らずも自分の講義のあり方を振り返り、ブラッシュアップするこ

² 『世に棲む日々』は、司馬遼太郎が吉田松陰と高杉晋作を主人公に描いた歴史小説のタイトルである。本文で後述するように、本稿のキーワードは「オンデマンド型講義を面白く」である。もちろん講義が創作であってはならないことは論を俟たない。しかしオンデマンド型講義では、用いる素材を親しみやすく、説明を分かり易くする工夫をもっと積極的に試みるべきではないかという着想を得たのは、実は研究と見紛うばかりの精緻さと、文学としての面白さとを兼備した司馬作品からである。同作品は、1969年から70年にか

けて『週刊朝日』に連載されたが、私は大学1年時（90年代）に文庫本で通読した。偉大なる司馬作品の数々は、高等学校までの歴史教育と大学での専門的な研究教育との橋渡しの役割を果たしてくれる名著とあって良い。

³ 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.21、2021年2月、225～235頁。

⁴ 『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.22、2021年11月、157～166頁。

とに帰結するとは、当初はまったく想像だにしていなかった。

そもそもオンデマンド型講義の教材作成において、平素の対面講義に負けない水準の教育を実現させようと強く意識し、高い目標を定めたことが幸いしたのであろう。従来の講義内容につき、時間や労力を惜しまず、出典や底本にまで遡った講義ノートの徹底的な再点検をおこない、個別の事例等につきインターネットでの検索もして時事ニュースにも目を配り、随所で、分かりやすい説明のための工夫を試みることとなった。具体的には、板書に講述というオーソドックスな説明で済ませていた講義内容の質を高めるため、オンデマンド型講義に必要な Microsoft PowerPoint (以下、パワポと略記する) の画面上には、これまでに用いることのなかった写真や絵画、解説のためにみずから制作した図表なども積極的に掲載するようにした。

そして、その成果の一部を二つの前稿に公表したおかげで、さまざまな方から貴重なご意見や、ご指導・ご鞭撻も賜わることができた。それらはいまでもなく、私の講義のさらなる質の向上に結実していくのであるから好循環このうえない。まさしく、情けは人のためならずの心境である。

実のところ本稿も、紙幅の都合により前稿②で論じきれなかった内容を別建てで公表しようということから着想を得たものである。内容でみれば前稿②で考察した「ソフト面の工夫」の一事例に他ならない⁵。ところが、難解な講義内容をキャラクターの活用によって、分かり易く、面白く、親しみやすいものにしようという試みは、一つの章や節のなかで論じ切れるような小さなテーマではなく、今回も瞬

く間に紙幅が尽きることとなった。

かくも書きたいことが次々に湧き出てくるとは、まさに嬉しい誤算であったが、冷静に考えてみればそれは私個人に限った話ではないはずである。そのように発想し、仲間に相談してみたところ、すぐに協賛をえることができた。もっか共同研究の企画を進めるとともに、学会でもシンポジウムを企画していただけることとなった⁶。

登壇者が随意に選んだ「政治学のあるテーマ」を、どのような教材を使用してどう教授したところ、学生からどういった反応があり、いかなる教育成果が得られたのか。このアウトラインのもと、研究報告を複数人でおこなえば、それは主権者教育として重要な位置を占める政治学全体の質の向上に、必ずや寄与していくはずである。

従来の常識で考えればいたって仕方のない話ではあるが、個々の専門的な研究成果が平素の講義内容に反映されるようになるまでには、それ相応の時間とプロセスを要する⁷。しかし、本稿で提示した手法を採れば、それらを一気に短縮できるだけでなく、少なくとも参加者全員の知見や技法がさまざまな形で集約され、共有財産化されることになるであろう。それゆえ、本稿の目的とするところも、オンデマンド型講義で得た知見を向後の講義にどのように活かしてゆくかという、きわめてポジティブなものに据えた次第である。

なお、本稿で考察の対象とするオンデマンド型講義は、前稿と同じく今回も政治学である。2021年現在、本務先である三軒茶屋キャンパスでは月曜日の4時限に前期開講科目の「政治学1」と後期開講科目の「政治学2」を担当し、他にも経済学部でも金曜日

⁵ 当初、前稿②の第3章は「ソフトウェアの活用とキャラクター起用」としていたが、紙幅が全12頁を超過してしまい、急遽その箇所を全て割愛することとなった。それゆえ、前稿②の英文要旨は、末尾が「using characters in on-demand lectures」となっている。

⁶ 共同研究の方は、哲学、法学、国際法、国際政治を専攻する職場の同僚4名の協賛を得ることができたので、日本学術振興会の科学研究費助成事業の公募へ計画を提出している。他方、学会での活動は、日本臨床政治学会の現代政治研究部会2021年度第1回研究報告会(同11月28日)において「コロナ禍と主権者教

育としての政治学～アフターコロナの政治学」というテーマで発表し、当テーマでの研究促進を呼びかけた。結果、2021年度中に現代政治研究部会を数度開催する運びとなり(3月を予定)、私以外にも発表者を募ることとなった。

⁷ もっとも、私が30代前半までの非常勤講師の時分には、余裕をもって学会に参加できる時間があったため、専攻分野以外の研究会にも積極的に参加し、そこで学んだ最新の知見を講義の脱線話として紹介することもしばしばで、好評であったと記憶している。

の4時限と5時限に「政治学」(通年)を担当している。今年度の履修者は、三茶キャンパスでは「政治学1」は、危機管理学部の学生42名(前年度30名)と、スポーツ科学部の学生15名(前年度27名)の合計57名、「政治学2」は、危機感理学部の学生25名(前年度12名)と、スポーツ科学部の学生10名(前年度13名)の合計35名(前年度25名)である。通年の「政治学」は経済学部では4時限が152名(前年度332名)で、5時限が87名(前年度86名)の合計239名(前年度418名)である⁸。よって以下、本稿で論じる内容は、今年度の履修者296名及び前年度の履修者475名の、総勢771名の学生を対象とする3コマの講義での実体験をもとに書かれたものである。

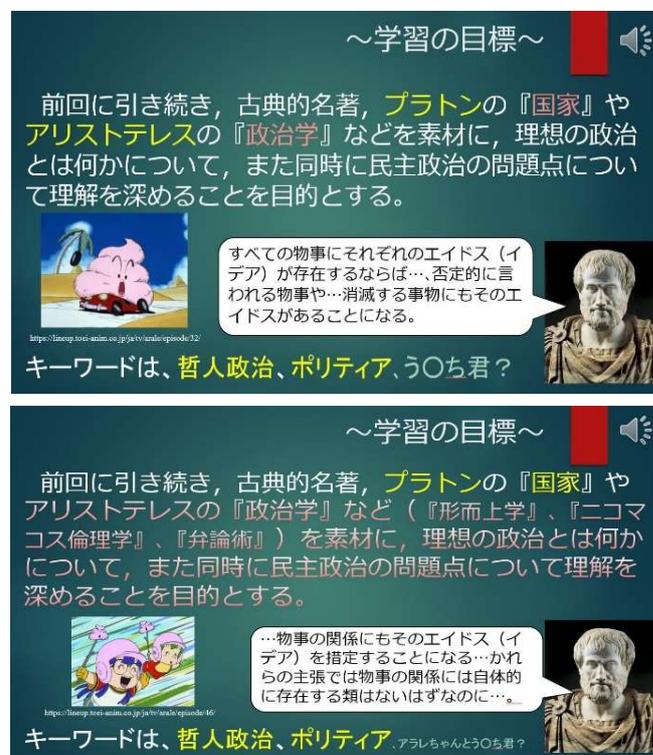
3.キャラクターの使用事例 ～なごみ効果とTA効果～

平素おこなわれてきた通常の対面講義では、私は常に「学生との対話」を重視しながら講述をしてきた。受講生が講義内容を正確に理解できているかが不安であったり、私語の予防措置でもあったりと、その理由はさまざまあるが、端的に言えばその方が断然、講義が楽しいものになるからである⁹。そうした講義スタイルを長年採ってきた私にとって、対話の相手が存在しないコロナ禍でのオンデマンド型講義は、実に味気のない、つまらないものになるはずであった。

右の図1は、実は前稿②でもその一部分を掲載したものであるが(上段のみ)、上部の標題に「学習の

目標」とあるように、本来はこれから解説する講義内容を予告するために設けられたパウポの一コマである¹⁰。

図1 講義動画第12回(2021年度)の学習の目標



出所：パウポと切り取り&スケッチ(Microsoft 2018)で制作。画像の出所は注10に記した。

いささか唐突ではあるが、本稿の読者は、この図1において、かの有名なアリストテレスとアニメのキャラクターとが同じスライド上に並んで登場している様子を一瞥してどう感じるであろうか。アリストテレスに挿入された吹き出しの文言を、漫画のよう

⁸ 前稿①は2020年度、前稿②は2021年度のいずれも前期終了時に執筆されたものである。よって、二つの前稿では後期の履修者は総数に計上しなかったが、これを含む本稿では後期開講の政治学2(三茶キャンパス)の履修者も計上した。しかし、その相当数は「政治学1」の履修者でもあるため、総数に重複が生じていることを断っておく。

⁹ もっとも、私とて、対話講義ばかりを行ってきたわけではない。例えば日本医療科学大学で医療関係法規を担当した際は、受講生の目的が看護師試験の合格に特化されていたため、過去問の解説をベースにして教科書に線を引かせたり、書き込みをさせたりする国家試験対策講座を行った。日本福祉教育専門学校で社会

福祉士養成クラスの法学を担当した際も、おおむね事情は同様であった。

¹⁰ 前稿②、161頁。画像は図の右側がアリストテレスで、左側が鳥山明原作の『Dr.スランプ』に登場する「うんちくん」である。なお、前者の出所は入手から時間がかなり経過しているため、遺憾ながら判然としない。後者は「東映アニメーション作品ラインナップHP」(<https://lineup.toei-anim.co.jp/ja/tv/arale/>)から引用した。『Dr.スランプ』は、1980年代に集英社の『週刊少年ジャンプ』で連載された漫画で、『Dr.スランプアラレちゃん』としてアニメ化され、フジテレビ系列で放送された(1981年4月～1986年2月)。「集英社HP」(<https://books.shueisha.co.jp/>)を参照。

に上段から下段へと読んでもらえれば、両者の関係について察しのつく読者もいるものと思われる¹¹。

これらは、アリストテレスにとっては師にあたるプラトンが展開したイデア論に対して、アリストテレス自身が試みた痛烈な批判の幾つかを分かり易く紹介するために作成されたスライドである。事例そのものは上品とはいいい難いかもしれないが、アラレちゃんの画像を起用することで、これを見る者をなごませ、かつ理解を容易にすることであろう。いうまでもなく、オンデマンド型講義を担当することがなければ、おそらくは未来永劫、試みられることがなかった私なりの工夫といえる。

そもその図1は、第12回講義のパワポの冒頭から2番目と3番目のスライドであり、先述したように本日の「学習の目標」について説明するためのスライドである¹²。本稿では、小さい画像ゆえに却って判別し辛くなってしまったが、当日の講義で扱う部分を文字の配色を変えることで強調していることが分かるであろうか。そこに、見覚えのあるキャラクターが登場し、特定の意義ある知識を授けてくれるとしたらどうであろう。以降の難解な講義がすべて

楽しいものに映じるはず、とまで都合良くはいかないかもしれないが、“なごみ効果”により良好なスタートが切れることは疑うべくもない。

ここでの教授内容とキャラクター起用の関係につき、念のために解説をしておく、要はアリストテレスが主張する「否定的に言われる物事」や「消滅する事物」などにエイドスがあるのかという批判の事例に「うんちくん」を、同じく「事物の関係」の事例に「うんちくんで遊ぶアラレちゃん」を用いた次第である。遅れ馳せながら紹介しておく、これらは、鳥山明原作の『Dr.スランプ』に登場するキャラクターで、私の個人的な嗜好と、何より受講生を少しでも明るい気持ちにさせ、元気付けたいという一念でおこなった起用であった¹³。

なお、イデア論は、哲学において必須の知識であるのみならず、プラトンの理想とする政体を受講生に理解してもらう上で、必ず解説しておかなければならない大事な前提となる知識といえる¹⁴。しかし、哲学の講義ではない以上、アリストテレスの政治思想を解説する上で、彼のイデア論批判は必須の知識とまではいえない¹⁵。とはいえ、プラトンとの関係に

¹¹ アリストテレス・出隆訳『形而上学 下』（岩波書店、1961年）、184頁（第4章）を参照。

¹² 平素の講義では冒頭の挨拶の後は、いわゆる前回のフィードバックとして受講確認クイズの正解とその正答率を示し、解説を行う流れとなっている。

¹³ 偶然という他ないが、実はコロナ禍一年目における政治学の受講生に作曲家菊池俊輔の孫がいた。当該学生は、私がコロナ禍で意気消沈している受講生を元気づけたいがためにオンデマンド型講義でキャラクターの起用をしたことに賛同し、まさにその明るいイメージの生みの親である祖父の事績のことを私に教えてくれたのである。早速、菊池の業績について調べてみたところ、その質も量も圧巻というほか無く、それらが一人の作曲家から生み出された事実には吃驚仰天というほかなかった。そして私が特定のキャラクターを想起する際、そこに菊池の音楽が伴っているからこそ、勇壮なものはより勇壮に、楽しいものは一層楽しく想起されるのだという不可分の関係に気づき、我々の日常を彩る音楽の偉大さを再認識することができた。余談ながら当該学生自身も、リアペに綴られる独自の視点や、発展学習の様子において卓抜しており、講義担当者としては毎回毎回大いに励まされ勇気づけられた。なお、誠に遺憾ながら作曲家菊池俊輔は、本年4

月に逝去されたそうである。当該学生が訃報を報せてくれるとともに、前年度に引き続きこうした明るい講義を展開していることを「天国の祖父も喜んでと思います」との大変有り難いコメントを寄せてくれた。オンデマンド型講義にもかかわらずこうした特筆すべき素晴らしい学生と出会え、忘れ難い対話ができただけに、ただただ感謝である。不躰ながらこの場を借りて、前途洋々たる若者の未来に栄光あらんことを祈念するとともに、偉大な作曲家に心より御礼申し上げ、かつご冥福をお祈り申し上げたい。

¹⁴ 前稿①でも紹介したように、私の「政治学」では、プラトンとアリストテレスの政治思想についてはかなりの時間を割いて解説している。これらは古代を代表する政治思想というだけでなく、両者を比較してみると、以後の講義内容どころか、まさに現代社会の様々な政治問題を読み解く鍵ともなるからである。

¹⁵ 私がプラトンの『国家』を初めて読む契機となったのは、大学一年次に履修した嘉吉純夫先生の哲学の講義であった。大変分かり易く興味深い講義で、夏休みに母を亡くしたばかりの私にとって、五感で認知できる現実世界よりもイデアを重視し、魂の不死を説くプラトン哲学との出会いはまさに衝撃であった。講義に

においてアリストテレスの基本的な立ち位置を理解し、両者の本質的な相違を把握する上では象徴的な事例であり、無駄な情報とまではいえないであろう。それゆえ講義導入部の雑学・脱線話として、なごみ効果を企図しつつ、敢えてこうした取り上げ方をしたというわけである。

ちなみに、誠に便利なことに、図中のアリストテレスの吹き出しの文言は、私自身がこれを別して読み上げなくても講義は成立する。それは、すでに前回までの講義のなかで、アリストテレスがプラトンの弟子で、師の理論を批判的に受け継いで発展させたという情報を示しているからであり、受講生からすればアリストテレスは、むしろ私以上に注目すべき教師に他ならないからである。よって、こちらが促さずとも、学生たちは勝手にアリストテレスの吹き出し部分をあたかも漫画を読む感覚で自発的に読み、そこから学習してくれるのである¹⁶。

これはまさにキャラクター起用の「TA（ティーチングアシスタント）効果」とでもいうべきものであり、まだまだ試行錯誤の段階にすぎないが、やり方次第では想像を絶する教育効果が期待できることであろう。しかしながら、そうであるが故に、ここには遵守すべき一定のルールが存在するのであって、その点については章を改め、第5章であらためて論じることとしたい。まずは、政治史を専攻する私らしく、どのような経緯で講義にキャラクターを起用することとなったのかについて、順を追って明らかにしたい。

おけるアイデア論の教授方法は、先生から学んだものを基本に、私なりにアレンジした手法で行っている。

¹⁶ この点については、例えば、後述する図4のように、受講確認クイズを同様の方式で出題するなどして、その正答率から、ほぼ全員が吹き出し部分を読んでいることが確認できている。

¹⁷ 私がこうした工夫を自然にするようになったのは、敬愛なる有賀弘先生の影響ではないかと勝手に考えている。先生は、講義の合間でデュ・ガールの『チボー家の人々』やショーロホフの『静かなドン』、トルーキンの『指輪物語』などの話をされるのが大好きであった。背後にある世界史の深遠な知識と共に語られるそれらの脱線話は、もう圧巻という他なかった。むしろ、これは到底、私などに真似のできるレベルではない。

4. 対面講義でのキャラクター起用

先述したように、教材としてキャラクターを起用する手法は、オンデマンド型講義ならではの工夫である。とはいえ、もとをただせば平素の対面講義でも、特に難しい理論や権力関係などを説明する際、私はアニメーションのキャラクターを積極的に用いてきた¹⁷。たとえば、前稿①で紹介した、どちらかを採らなければならないとしたら「最悪の民主政治である衆愚政治と、ただ一人の哲人（独裁）による哲人政治のいずれを選択するか」というお題の小テストを実施し、これについて解説する際は、田中芳樹原作の『銀河英雄伝説』を必ずといって良い頻度で紹介してきた¹⁸。

また、トマス・ホップズの自然状態論について解説する際も、ドラえもんのキャラクターを用いて、たとえば力の強いジャイアンと頭の良い出木杉君、狡猾なスネ夫、平凡なのび太で構成される群れがあったとして、どのキャラが生存に有利かという議題設定で学生たちとの対話を試みてきた。俄然、議論は盛り上がり、百出するユニークな見解を楽しみながら解説をするやり方は、いつの間にか私の講義では通例となっていた¹⁹。

古くは小説や映画、近年では漫画やアニメを始めとするさまざまな娯楽文化は、そこで主題・副題とされているテーマについて語らう者の距離を瞬時に縮めてくれる大変便利なコミュニケーションツールとなる。いつの間にか私も年齢を重ね、学生たちが

¹⁸ 前稿、235頁。田中芳樹『銀河英雄伝説』（徳間書店、1982年）については、実は20歳も後半になってからアニメーションの一部を見たことがきっかけで原作を読んだ。本稿執筆を機に再調査してみたところ、大変魅力的な作品だけあって、アニメのリメイクはもちろん、ゲームや演劇など、私の知らない様々なコンテンツが存在することを知った。「銀河英雄伝説公式ポータルサイト」(<https://ginei.club/>)を参照。

¹⁹ 『ドラえもん』は、藤子・F・不二雄の漫画（小学館、1970年）が原作で、テレビや映画はもちろん、身近なグッズなどにも採用され、老若男女を問わずに愛され続ける秀逸な作品といえる。「ドラえもんチャンネル」(<https://dora-world.com/>)、「テレビ朝日ドラえもんHP」(<https://www.tv-asahi.co.jp/doraemon/>)を参照。

就職後に接する上司たちの年代に達した。かつて私の師事した先生方が司馬遼太郎や池波正太郎などの作品を楽しそうに紹介してくれたように、私も折に触れてガンダムやナウシカの魅力について話をすることが、眼前の学生たちと上司世代との交流を円滑化させることに繋がるのではないかなどと、強く意識するようになっていったのである²⁰。

もちろん、ロックやルソーといった巨人たちの肖像は、かなり以前から資料集の画像をスキャナーでスキャンして教材とし、折に触れて使用してきた。ところが、これらのアニメキャラの起用は年度を重ねるうちに定番化していったものの、わざわざ画像を入手・保存してまでして講義で使うことは実のところ皆無であった。矛盾した話であるが、これらの使用には確かに諸々意義はあるが、第一義的には面倒な作業や込み入った状況説明を省いても、瞬時に学生たちの興味を喚起し、有益な対話ができるという利便性にあると認識していたからである。

つまりは、シンプルな丸と線だけで構成された棒人間たちを甲さんや乙君などと名付けて説明するよりも「ルパン三世と銭形警部」とした方が余計な説明が省けるというわけである²¹。いわば、学生たちと共通の知人であるキャラクターを、講義で事例に用いていたに過ぎないという方が適当かもしれない。

5. コロナ禍の講義と発言するキャラクターの登場

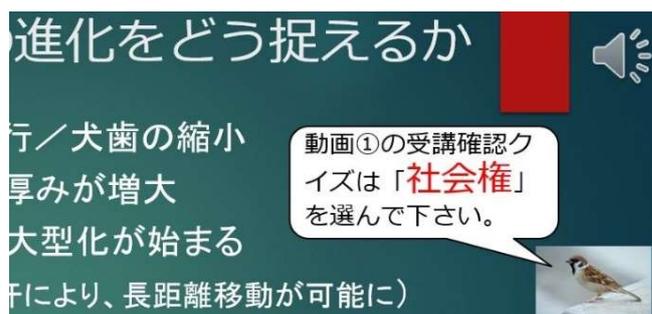
この状況を一変させたのが、昨年来のコロナ禍であった。元来、私の政治学では、学生に主体的に考えてもらうために時折クイズを出したり、直接質問をして学生の意見や価値観を議論の前提として確認

²⁰ 『機動戦士ガンダム』は、矢立肇（サンライズの用いるペンネーム）・富野喜幸が原作のアニメーションで、名古屋テレビやテレビ朝日系列で放送され（1979年4月～1980年1月）、現在もその続編等が制作されている。『風の谷のナウシカ』は、宮崎駿の漫画（徳間書店、1982年）の一部分が1984年に映画化され、これも絶大な人気を博した。前者は「機動戦士ガンダム公式 Web」（<http://www.gundam.jp/tv/index.html>）、後者は「スタジオジブリ HP」（<https://www.ghibli.jp/>）を参照した。因みに、ジブリ HP には「作品静止画」が複数掲載されており、「画像は常識の範囲でご自由に

したり、といった工夫をしてきた。ところが、オンデマンド型講義では、対話を試みようにも話し相手となる学生が眼前にいない。もちろん、リアペに寄せられた意見や、前年度の受講生の意見を紹介するといった工夫はできるが、どうしても臨場感には欠けてしまう。

そこで便利なのが、オンデマンド型講義でも私の「対話の相手」になってくれる、いわばアシスタントとしてのキャラクターの存在である。これまで、学生との対話を重視する講義スタイルを採用してきた者としては、次の図2のように、講義担当者の投げ掛けに反応してくれるキャラクターがいることは何とも有り難い。さしずめ、いつも最前列で講義を熱心に受講し、時折、発言をしてくれる優等生の様な存在でもある。

図2 講義動画第2回（2021年度）



出所：パワポで制作。ゆえあって雀の画像が小さいため、画面の一部を拡大してある。写真は瀧川が撮影。

図2の写真は、私が数年前に撮影したどこにでも存在する普通の雀であるが、勝手に「学問のスズメ」と名付けてキャラクター化したものである。ここでは私の代わりに「受講確認クイズ」（受講生が講義動画を視聴したことを確認するためのクイズ）を出題してもらっている²²。

お使いください」とされている。私のような者からすれば、大変有り難い配慮であるが、後述するように使用者のモラルが重要といえる。

²¹ 『ルパン三世』は、モンキーパンチの漫画（双葉社、1967年）が原作で、アニメ化以降（1971年10月）、実に様々なコンテンツとなって長きにわたり、人気を博し続けている。「ルパン三世 NETWORK」（<https://www.lupin-3rd.net/>）を参照。

²² こうした出席確認の代替手段としてのクイズも、当初はキーワードを択ばせる単純な形式が主であった

こうした講義の進め方は、不思議なことにオンデマンド型講義においていつの間にか定着した手法である。少なくともコロナ禍二年目にはすっかり定番となり、「学問のスズメ」は、何と第1回目の講義動画から登場している。そこで、その起源はいったいどこにあるのかを私なりに追跡してみた。

まずもって原因といえるのは、コロナ禍でオンデマンド型講義になって以降、落胆している受講生の興味関心を喚起し、極力分かり易い説明を心掛けようという配慮から、補助資料として写真や図表をパワポに多用するようになった点である。次の図3は、人類の進化と政治の関係を考察する講義の導入部分、すなわち一年目の第2回講義から見られた工夫で、かつて私が方々の博物館で撮影したさまざまな化石人類の写真が豊富に使われている²³。これらに吹き出しをつけて会話をさせたならば、もはやキャラクターの完成となるが、もちろん当初からそのようなことをしていたわけではない。

図3 講義動画第3回 (2021年度)



出所: パワポで制作。写真は東京国立博物館で瀧川が撮影。

次にいえるのは、古いPCを使用していた、いわば怪我の功名という点である。前稿②で述べたように、コロナ禍当初に私が使用していたPCは、古くて性能も悪く、特に講義動画の音声をパワポで直接録音

すると受講生に聴いてもらうには申し訳ないほどに音質が悪くなってしまった²⁴。そこで学会発表や研究会等で大活躍のUSBレコーダーで録音したMP3の音声を、順番にパワポに貼り付ける方式で動画を作成することにした。

そして、これもパワポのバージョンが古かったからなのであろうが、これらMP3の音声を動画上で順番通りに再生するにも一苦労があった。本来ならば「アニメーションの順序変更」で順番を設定すれば簡単に済む作業であるが、なぜか動画に変換すると、複数の音声が一斉に流れ出してしまうという奇怪なトラブルに何度も見舞われたのである。その度に時間を大幅に浪費する再変換を強いられ、何度も何度も試行錯誤するうちに、画像をアニメーションで登場させる設定と音声を連動させると、この現象が起きないことを発見したのであった。つまりは、必要に迫られて、より一層、パワポ上で音声と連動させる画像を多用するようになっていったのである。

しかし、制作する側としては複数の音声を順番通りにつなげたいという明確な目的があるにせよ、講義内容と無関係な画像をいたずらにパワポ上に表示すれば、受講生は混乱するだけである。そこで日常ありふれた小さな雀の画像ならば画面に現れたり消えたりしても別段気にはならないであろうと発想し、使用するようになったのが、実は先ほどの「学問のスズメ」であった。

したがって、当初よりこの雀が台詞を話すようなことはむろんなく、過去のパワポを遡って調査したところ、結論、私の講義動画におけるキャラクターの起用は、一年目の第6回講義が最初であった。具体的には次頁の図4のように大久保利通と犬養毅が私のオンデマンド型講義で発言した最初のキャラクターであった²⁵。

が、慣れてくると講義内容の理解度を測定する手の込んだものへと発展していった。

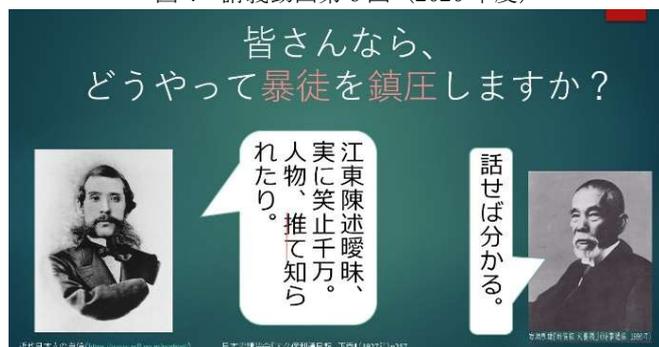
²³ 因みに政治学の第1回目は、教材の解説や成績評価の仕方など、いわゆるガイダンスのみで構成される。よって、純粹な講義としての初回は第2回目目がこれに該当する。

²⁴ 前稿②、159頁。

²⁵ 大久保利通の画像については、国立国会図書館の

「近代日本人の肖像」(<https://www.ndl.go.jp/portrait/>)から転載し、佐賀の乱で破れた江藤新平を評した同発言については、日本史蹟協会『大久保利通日記 下巻』(日本史蹟協会、1927年)、p257を引用した。因みに江藤を「江東」としているのは、大久保本人によるものである。他方の犬養毅の画像は、岩淵辰雄『新装版 犬養毅』(時事通信、1986年)に所収のものをス

図4 講義動画第6回(2020年度)



出所：パワポと Active Clip lite で制作。画像の出所は注 25 に記した。

彼らを起用した趣旨としては、古代における神権政治の話をするにあたり、実定法が定着する以前の社会を統治することの困難さについて受講生に主体的に考えてもらうためである。すなわち「皆さんなら、どうやって暴徒を鎮圧しますか」という対話を試み、平素であれば、学生たちのさまざまな返答に合わせて、リーダーシップの在り方や影響力資源などについて話をするのであるが、当然、オンデマンド型講義では学生からの即時回答は望めない。そこで、なんとも贅沢なことに彼らにご登壇頂き、代表答弁をしてもらったという訳である。

6. キャラクター使用の注意点とオリジナルキャラクターの活用

以上のようにオンデマンド型講義においてキャラクターを使用することは、動画に親近感や臨場感などを付加し、擬似的な対話をも可能とする。それこそ『イタコの降霊術』ではないが、前頁の図4のよ

うに自分の講義で歴史上の人物に発言してもらうことすら可能である。総じてリアペの反応も頗る良好で、好意的な協賛の声だけではなく、優秀な学生たちからは、「興味を持ったので...について調べてみたところ...が理解できた」といった発展学習の成果を示す素晴らしい反応が、毎回少なからず届くようになった。

10 年来の経験に照らして考えるに、ここまでの反響は、正直対面講義でもごく一部の優等生に限られたものであった。それら講義によせられる活目すべきリアクションは、そのクオリティーにおいては同質であっても、量においては、明らかに従前よりも増加している。

しかし、そこには当然に遵守されなければならない重要なルールがある。それは図4に挿入された吹き出しを一瞥すれば歴然かと思われるが、「勝手な創作は許されない」という点である。私の専門領域に即していえば史料の改竄や、現代の知的財産権の問題でいえば著作者人格権の侵害は、許されざる行為なのであって、やはりここには細心の注意が求められるであろう²⁶。

それこそマキャヴェッリの権謀術数主義にせよ、アルプスの少女ハイジの美しい友愛にせよ、それらを講義で使用する限りにおいて我々は、彼らのメッセージがもつ普遍性の紹介者に過ぎない²⁷。いかに崇高なる教育目的があろうとも、勝手な創作によってオリジナル作品の思想を歪めたり、広くその人格のイメージを損なうような加工をしたりすることは、厳に慎まなければならない。この点については、何

キャナーで取り込んで転載し、五・一五事件に際して犬飼が実行犯を論じたという同発言については、余りにも著名すぎるため特に典拠はない。

²⁶ 特に同一性保持権が問題となる。著作権法第20条第1項には、「著作者は、その著作物及びその題号の同一性を保持する権利を有し、その意に反してこれらの変更、切除その他の改変を受けないものとする」とある。

²⁷ 『アルプスの少女ハイジ』は、高畑勲(演出)に宮崎駿(場面設定・画面構成)、小田部羊一(キャラクターデザイン・作画監督)らのもと、瑞鷹エンタープライズで制作されたアニメで、初回のTV放送は1974年とのことである。「アルプスの少女ハイジ公式HP」

(<http://www.heidi.ne.jp/>)を参照。同アニメのキャラクターは、最近では学習塾のCMで起用されているため、学生の認知度はきわめて高い。私もコロナ禍一年目の後期に受講確認クイズの正答率などを周知するキャラクターとしてハイジとその仲間を使用させて頂いた。なお、それ以前、平素の講義でも、第一次エンクロージャーについて説明するにあたり、何故、農村から都市部へ労働力人口が流出したかを受講生に考えてもらう際、そもそも土地を囲い込んでおこなわれた牧羊が、どのような仕事かを連想させるヒントとして、羊飼いならぬ山羊飼いの少年ペーターを引き合いに出して解説してきた。

はさておき、本稿を公刊するにあたって一番に強調しておきたい。

そこで便利なのが、先述した「学問のスズメ」、すなわち、私自身が著作権者にほかならないオリジナルキャラクターの活用ということになる。それこそスマートフォン一つで、飼い犬でも水槽の魚でも随意に生き物を撮影し、画像データにしまいさえすれば、あとはPCで拡大・縮小に反転など、簡単に画像の加工もできるため、オリジナルキャラクターは誰にでもいたって気軽に作成できる。さまざまなキャラクターが持つ普遍的なイメージを侵犯するおそれがある場合はオリジナルキャラクターを起用するに越したことはない。

あるいは、以下の図5のように、他ならぬ講義担当者自身をキャラクターとして起用してみるのも面白い展開となるはずである²⁸。

図5 講義動画第28回(2021年度)



出所：パワポで制作。

経験で語れば、たとえば平素の講義では割愛する講義担当者の内心や感想、弱音などを吐露させてみることで、これまでの講義とは違った展開が可能となる。圧倒的に便利な使い方としては、動画撮影時に話し忘れた事務連絡などを、リメイクすることなく事後的に追加できる点であろう。

元来、文系の講義に助手やTA、SA (Student Assistant)

が付くことはきわめて稀であるが、オンデマンド型講義では、擬似的ながら、工夫次第で容易にこうした状況が作り出せる。たとえば、前稿②で紹介した「音声読み上げソフト」とオリジナルキャラクターを組み合わせれば、ドイツ語の堪能な自分の分身に、ネイティブ並みの発音を駆使して講義を手伝ってもらうことすら可能となることであろう²⁹。あるいは、オンデマンド型講義で作成したパワポにキャラクターの画像と音声データを記録しておきさえすれば、対面講義においてもプレゼンマウスで遠隔操作をおこなうなどして順次動画を起動させ、キャラクターとの掛け合い講義をおこなうことも可能といえる。

むろん、そこまでの凝った演出をするには、それ相応の準備が必要不可欠となる。しかし、それらの教材はベースとなるものをひとたび作成してしまえば微調整や焼き直しは、比較的容易にできるはずである。向後、これまでにはなかった个性的かつ魅力的な講義が百出することになるかもしれない。もちろん、我々にとって講義内容の研鑽こそが最も重要であることは論を俟たない。しかし、それをどう伝えるかも大切な要素であるには違いない。私自身もこの両面において鋭意努力を続けたい。

7.今後の展望

以上がキャラクターを用いたオンデマンド型「政治学」の諸相である。前稿もそうであったが、今回もその全容を本稿で紹介し尽くすことは到底できなかった。それどころか、キャラクターの起用については、ほんの一断面を紹介できたに過ぎず、当の私自身がまだこうした教育手法に習熟できているとはいいがたい。紙幅の都合で一度筆をおくが、今後も寄せられた意見や受講生のリアクションから真摯に学びつつ、効果的と思われる事例につき公表をして

²⁸ 図5は、ちょうど本稿の脱稿日にパワポで作成した教材である。第28回(半期で第13回)に限らず講義の劈頭は、「スライドショーの記録」等で撮影した動画を挿入し、受講生に挨拶がてら時事や近況などについて必ず話をするようにしている。因みに第26回(半期で第11回)では、もっか捜査中の大学幹部の汚職事件につき、この場を借りて一教員としての謝意

を表明した。具体的には、長岡藩の「米百俵の精神」の話と共に、教育に掛ける資金は未来の子どもたちや、明るい社会の実現へ向けての我が身を犠牲にした投資であり、それがいかに尊いものであるかについて語った。

²⁹ 前稿②、164～165頁。

いきたいと考えている。

現況につき少しく報告をしておく、もっか本務校である日本大学危機管理学部において今年度より担当している「危機管理特殊講義 1 入管法・税関」の講義においても、キャラクターを用いたオンデマンド型講義を展開している³⁰。こちらは、そもそも専門科目であり、また前任者が元入国管理局長官の高宅茂先生であるため、キャラクターは私のオリジナルのみを使用し、あくまで関連する条文やキーワードなどを強調する役割等で限定的に起用している。当該講義の担当者として明らかに役不足である私にとっては、キャラクターは実に有り難い存在であり、心強い味方として重宝している。キャラクターには、笑いを喚起し明るい雰囲気醸成するだけでなく、ひとことで表現すれば講義の厳粛さを維持した控えめな使用方法もあるということを実感しつつ、毎回毎回、試行錯誤を繰り返している。その成果については、近々報告できれば幸いである。

最後に、またしても二つの前稿とほぼ同様の幕の引きかたとなってしまうが、やはり熱心に私の講義を受講してくれた学生たちに、心より感謝の言葉を捧げたい。コロナ禍の苦しい状況にもめげず、主体性・積極性・自主性を遺憾なく発揮して作成してくれる彼らのリアペやノートは、まさに私の生き甲斐

である。そして、彼らの懸命な努力に報いるためにも、そこで得られた素晴らしい知見を政治学全般の発展のために一層活用できるように、私なりに地道に論考をまとめて公表し、学会でもチャンスを活かして研究発表等に臨みたいと考えている。

言葉というものは時に残酷である。枚挙にいとまがないがジェレミー・ベンサム「最大多数の最大幸福 (The greatest happiness of the greatest number)」などは、まさにその典型例であろう³¹。彼が匿名の著作でたった一度使用したこの言葉は、彼の代名詞であるかのように認識され、かつ意味も多分に誤解されたままひとり歩きを始めてしまった。ベンサムの意図としては、自然法と契約説の曖昧さやコモン・ローの恣意的運用に対する抗議の意図から、統治の根拠を人間にとっての効用という実質的かつ合理的基準に求めようとした次第であるが、巷間では功利主義の権化のように扱われてしまっている。

実は私自身にも、かつて過熱報道の炎に焼かれた苦い経験がある。歴史家が取材を断る常套句として「私は幕末から明治時代が専門なので、現代のことには疎い」と週刊誌の取材を断ったところ、後半部分だけを記事の見出しに切り取られてしまったのである³²。「コロナ世代」などという語呂の良い言葉が誤った認識のもとに通用しないことを祈念すると

³⁰ 当講義は、令和二年度をもって日本大学危機管理学部を定年退職された高宅茂先生から引き継がせて頂いたものである。当該学問領域の普及と発展を願われる先生は、大学を去られるにあたり、様々な貴重資料と共に、何と自らの音声の入った講義スライドまで私に無償で譲り渡して下さった。まさに高潔の士という言葉が相応しい先生とは、折に触れて何度か一緒に仕事をさせて頂き、その都度、丁寧かつ無駄のない素晴らしいご指導を賜った。さらには、共著『外国人の受入れと日本社会』（日本加除出版、2018年）まで刊行させて頂く幸運に恵まれた。先生にはひたすら感謝である。

³¹ 菊池肇哉・瀧川修吾「最大多数の最大幸福 (ベンサム)」(西山敏夫・松嶋隆弘・吉原達也編『リーガル・マキシム—現代に生きる法の名言・格言—』三修社、2013年) 137~138頁を参照。

³² 『週刊新潮』5月31日号(2018年)、127頁を参照。当時は本学アメリカンフットボール部の危険タックル問題で世間は沸騰し、私の研究室にも取材の電話

があった。記者は匿名でも構わないので取材に応じて欲しいとの要望であったが、私にはアメフト部に関することがらで提供できるような情報は何もなかった。ただ、たまたまその時、学生2名が進路相談に来室していたので、「言論の自由があるあなた方に、ものを書くなどでは申せませんが、事件とは無関係な学生たちが風評被害で自らの就職活動に悪影響が出ないかと心を痛めていることだけは忘れないで、ジャーナリストの使命を全うして頂きたい」と述べ、学生を待たせている手前、僅か数分で電話を切った。当時、私の研究室の電話番号が掲載されていた同じHPには、当然、私の研究業績やキャリア(当時は日本出版学会の出版法制研究部会の副部長まで勤めていた)も掲載されていた。わずか数行下に書かれていたそれらの情報すら確認せず「現代のことには疎い」という社交辞令を鵜呑みにして、見出しに採用してしまったのであろう。かくも杜撰な取材と報道姿勢で真実に近づき、社会の木鐸になど、なれようはずもない。

もに、向後、むしろ「コロナ世代」の優秀な受講生たちと作り上げた教育手法を未来へ向けて発展的に繋いでいけるように尽力したい。

(Received: January 21,2022)

(Issued in internet Edition: February 4,2022)